



今月の先生

岐阜市民病院

西垣 洋一氏

肝臓内科部長兼消化器内科副部長

昭和62年岐阜大学医学部卒。岐阜大学付属病院などを経て現職。肝がんの早期発見と経皮的治療が専門。日本肝臓学会・日本消化器病学会指導医・専門医、日本消化器内視鏡学会専門医など

働くあなたのクリニック



早期発見が重要

C型肝炎と肝がん

「沈黙の臓器」と呼ばれる肝臓、その理由は、病気が進行していても症状が表れにくく、症状が表れた時には既に随分と進行していることが多いといわれています。今回は、肝臓病の中でも重要な疾患であるC型肝炎と肝がんについて伺いました。

C型肝炎とはどんなものでしょうか？

C型肝炎は、日本人の100人に1人の割合で見られるウイルス性の肝炎で、放置しておくとも高率に肝硬変、肝がんに進展していきます。特に肝硬変になりますと、1年で7%の人に肝がんが発生します。したがって肝がんが出ないうちに治療を行うことが重要です。

C型肝炎はどのように治療するのでしょうか？

治療にはインターフェロンが使われます。C型肝炎ウイルスには、大きく分けて1型と2型の二つのタイプがあり、

インターフェロン治療は高額ですか？

最近インターフェロン治療に医療費の助成が始まりました。自己負担限度額が月額1万円となり（市民税課税年額が235,000円以上の場合2万円）、治療を受けやすくなっています。

肝がんでも他のがんと同じように早期発見が重要でしょうか？

他のがんと同様に、肝がんにおいても早期診断が最も重要です。小さながんであれば、肝臓を切らなくても針を刺して焼いてしまう治療（経皮的ラジオ波凝固療法）が可能だからです。特にC型肝炎の方は、3ヶ月ごとのエコー検査と6ヶ月ごとの造影CTまたはMRI検査を行う必要があります。定期的に根気強く画像検査を行っていただければ、小さながんを発見することが可能です。

日本人では1型が70%、2型が30%の割合です。このウイルスのタイプとウイルス量によりインターフェロンの治療効果が決まってきます。すなわちインターフェロン治療により、1型高ウイルスで5割、2型および低ウイルスで8~9割の方が治癒します。現在のインターフェロン治療は、ペグインターフェロンという週1回のインターフェロンと毎日飲むリバビリンという抗ウイルス薬が主流になっています。

インターフェロン治療でウイルスが消えてしまえば、肝臓は良くなるのでしょうか？

インターフェロン治療でウイルスが消えてしまえば、たとえ肝硬変であっても少しずつ回復してきます。また肝がんがでてくることはまずありません。しかし非常にまれに、治療後に肝がんが出てくる場合がありますので、治療後10年間は6か月に1度の超音波検査をお勧めしています。

早期の治療は、どのように治療するのでしょうか？

早期に発見された比較的小さな肝細胞癌は、そのがんの悪性と肝機能に応じて、肝切除か経皮的ラジオ波凝固療法（RFA）のいずれかの治療が選択されます。例えば、悪性度が高ければ肝切除を、悪性度が低い場合や肝予備能が悪い場合はRFAを選択するのが良いと思われます。

再発した場合の対策はありますか？

肝がんには、根治的治療をおこなっても再発が年率約20%と極めて高率であるという大きな問題があります。背景にウイルス性肝疾患があるために、また別の場所からがんが発生してくるからです。現在、再発を抑える効果があり、使用可能なものはインターフェロンしかありません。そこで、肝がんの治療後には積極的にインターフェロン治療をお勧めしています。これにより、明らかに再発は少なくなり、ウイルスを抑えて肝機能を良くする効果もあります。